「みんなで考え、話し合う道徳」学習指導案

平成 30 年 2 月 17 日
小金井市立東小学校
第 6 学年児童＆保護者等
100 名
指導者　後藤　忠

1　主題名　　友の涙　　B｛友情、信頼｝
教材名　「アトリエの思い出」植木　洋（小学校新学習指導要領の授業 道徳実践事例集 小学館）

2　主題設定の理由（指導観）

（1）ねらいとする道徳的価値について（価値観）

友達は家族以外で特にかかわりを深くもつ存在である。そして、友達は共通体験や心の交流などを通して一体感を深め、互いに影響し合いながら互いの人生を豊かなものにしていく。このように、友達と仲良くし、友達を信頼し、助け合い、励まし合う姿は友だち関係の望ましい姿である。

こうした関係を築くには、まず自ら友とのかかわりを求めることである。そして、友を理解し，友と協力し、友を大切にすることを通して信頼感や友情が育まれていく。

しかし時として、友のためによかれと思ってしたことが、かえって友を傷つけ悲しませる結果になることがある。こうしたことは、自分の一方的な思い込みを先行させ、友の立場や気持ちを理解していない時に起こりがちである。

したがって、良好な友達関係を築くには、友達の立場や気持ちを深く理解し、それを尊重しようとする態度で接することが大切である。

このようにして築かれた友情は、互いに友達のすばらしさ、大切さを実感させ、幸せで豊かな人生を拓く礎となると考える。

（2）児童の実態について（児童観）

＜省略＞

（3）教材について（教材観）

幼いころからの親友レオナルドとアントニーは画家になることを夢見て、小さなアトリエを借り、夢中で絵を描く日々を送っていた。絵画学校を卒業してすぐレオナルドは有名画家となるが、そのことをアントニーは我が事のように喜んだ。10 年後に大きなコンクールの審査員になったレオナルドは最終選考に残った 2 点の大賞候補の 1 つが親友アントニーの絵であることを知る。

「素晴らしいと先に決めた絵に票を投ずるべきか」「親友アントニーの絵に票を投ずるべきか」レオナルドは迷いに迷う。迷った末、レオナルドはアントニーの絵に 1 票を投じ、アントニーの絵は大賞に選ばれる。そのことを知ったアントニーは呆然と立ち尽くし、涙を流す。

後日の授賞式にはアントニーの姿はなかった。レオナルドは「アトリエの思い出」と題する大賞の絵を複雑な気持ちで見つめていた。

本時では、友のためと思ってした行為が逆に友を傷つけてしまったことを知ったレオナルドの複雑な気持ちを考えることを通して、友達の立場や気持ちを理解し、配慮することの大切さを実感させたいと考え、本教材を選択した。

3　指導上の留意事項

⑴　グループ（児童４人、大人２人）で協力して授業をつくるよう指示する。

⑵　この時間は大人・子供の区別はなく、対等な一人の人間として参加するよう指示する。

⑶　この時間での発言を後でとやかく言わないよう指示する。（実の親子は同じグループにしない。）

⑷　大きい教室に椅子だけ用意する。

4　本時のねらい

友のためと思ってした行為が逆に友を傷つけてしまったレオナルドの複雑な気持ちを考えることを通して、友達の立場や気持ちを理解し、それ大事にしようとする心情を育てる。

5　本時の学習指導過程

	学習活動と主な発問	・教師のはたらきかけ（指導上の留意点）　☆評価
導入	1　友達のためを思って何かをした経験を思い出しグループで交流する。	＜グループでの交流は車座で行わせる＞ ・自己紹介を兼ねて交流させる。 ・「経験がない、思い出せない」も容認するよう伝える。 ・終わったグループから前向きになるよう指示する。
展開の前段	2-⑴　教材「アトリエの思い出」レオナルドがどちらの絵を選ぶべきか迷う場面までを読み、役割演技をする。（教材の分断提示） ○　迷う レオナルド の内面を役割演技で表現し合おう。 右　先に決めた絵に票を入れるべき と考えるレオナルドの役 左　アントニーの絵に票を入れたい と考えるレオナルドの役 2-⑵　「アトリエの思い出」の続きを読んで話し合う。 ○　電話が切れた後で、レオナルドはアントニーのどんな気持ちに気付いたのだろう。 **◎　授賞式で飾られている大賞「アトリエの思い出」の絵を見つめているレオナルドの複雑な気持ちとはどのような気持ちか、詳しく考えてみよう。**	・教材を配布する。 ・主な登場人物をシルエットで紹介し、特にレオナルドの気持ちを考えながら読むよう指示する。 ・「間」に気を付け、臨場感ある範読に努める。 ・範読に合わせ、大賞候補の２つの絵を黒板に掲示する。 ＜グループ内で６人が３：３で向き合う＞ ・「先に決めた絵に票を入れるべきと考える レオナルド と「アントニーの絵に票を入れたいと考える レオナルド」の２つの立場からの役割演技を交互に３人：３人で「止め」と言うまで続けさせる。 ・右のレオナルドの役から開始する。 ・発言の前に必ず「しかし」を付けるよう指示する。 ・相手に説得されないで最後まで役割を演じ切るように助言する。 ・途中で役割交代を行う。 ＜座席を前向きにさせる＞ ・アントニーが「そうだったのか…」と言って力なく電話を切り、涙を落とす場面をおさえてから発問する。 ＜車座で話し合わせる＞ ＜前向きの座席にしてから発問する＞ ・授賞式にアントニーが来なかったことと、絵の題名が「アトリエの思い出」だったことを押さえてから発問する。＜車座で話し合わせる＞ ☆友達の立場や気持ちを理解して、それ大事にすることについて考えている。（発言）

展開の後段	3　友達にとって自分はどんな友達だったかを振り返る。 ○　自分のせいで友達を悲しませたり傷つけたりしたことはなかっただろうか。	＜座席を前向きにする＞ ・（主題名）「友の涙」と板書してから発問する。 ・目をつぶって自己を見つめさせる ・発表はさせない。 ☆本時の主題に基づいて今までの友人関係を振り返って考えている。（観察）※本当はワークシートに書かせるのがよいが…。
終末	4　講師の苦い体験談を聞く。	・高校の陸上競技部の友人古川誠三君の思い出。 ・グループの学習仲間と挨拶を交わして別れさせる。

材教　**アトリエの思い出**

　レオナルドとアントニーは幼いころからの友達で、二人は絵を描くことが大好きだった。二人とも、画家として活やくする夢を見ていた。
　やがて、二人は有名な絵画の学校に入学した。大好きな絵を勉強するために一生けんめいに働いて学費をはらい、わずかに残ったお金を出し合って小さなアトリエを借りた。そのアトリエで夢中に絵をかいたり、将来の夢やおたがいの絵について熱心に語り合ったりした。アトリエでの時間は、二人にとって大切なかけがえのないものであった。

　学校を卒業してすぐに、レオナルドに大きなチャンスがおとずれた。かれの応ぼした絵が、大きなコンクールで大賞を取ったのである。レオナルドは、真っ先にそのことをアントニーに伝えた。アントニーは自分のことのようにとても喜んだ。
「レオナルド、すごいじゃないか。君は、ぼくの自まんの友達だよ。このチャンスを大切にするんだぞ。」
　大賞をとったレオナルドは、またたく間に有名画家となった。かれの絵は高値で売れ、生活は一変した。いろいろな人たちとの付き合いが増えたかれは、いつしかアントニーと会うこともなくなっていった。
　レオナルドの活やくを心から喜んでいたアントニーは、それでよいと思った。

　十年後、レオナルドは有名なコンクールのしん査員となっていた。
「今年の絵は、どれもすばらしいですな。」
　審査員たちは口ぐちにそう言い、応ぼされた絵のレベルの高さに感心していた。多くの絵の中で、最終選考に二つの作品が残った。レオナルドは、この最終選考のしん査員を任されていた。どちらもすぐれた作品ではあったが、きれいな色づかいで独創性に富んだ絵に、レオナルドは心をひかれた。
（こんなにすばらしい絵は見たことがない。この絵を大賞にえらぼう。）
　大賞にえらぶ絵を決めたうえで、今一度、もう一方の絵に目をやったレオナルドは、はっとした。絵のすみに小さく書かれていたので分かりづらかったが、よく見ると、それは見覚えのあるサインだった。
（アントニーの絵だ！）
　なつかしいサインを目にして、レオナルドの心は大きく揺れた。会わなくなっても、アントニーのことをずっと気にかけていたレオナルド。かれには冷静なしん査はできなかった。すばらしいと思う絵を選ぶのか、それとも、友達のアントニーの絵をえらぶのか…。　　（分断提示）

迷いに迷ったすえ、レオナルドはアントニーの絵に票を入れた。接戦であった最終選考で、レオナルドの票が明暗を分けた。アントニーの絵が大賞をとったのである。

その夜、応ぼ用紙からアントニーの連絡先を知り、レオナルドは興奮気味に電話をした。
「よくここが分かったね。君から電話をかけてくれるなんてうれしいな。」
アントニーは、なつかしい友達の声にとても喜んだ。
「君の絵がコンクールで大賞をとったことを、一刻も早く伝えたくてね。」
「それは本当かい。しかし、なぜ君がそのことを知っているんだい？」
「実は、あのコンクールのしん査にたずさわっていたんだよ。あれは君の絵だと、サインを見て分かった。今回はすばらしい絵がたくさんあって、ぼくも迷ったよ。でも、友達の力になれて本当によかった。」
その話しぶりから、アントニーには、しん査時のレオナルドの心の中が容易に想像できた。しばらくのちんもくの後、
「そうだったのか…。」
そう言うと、アントニーは力なく受話器を置いた。しばし、ぼう然と立ちつくしたアントニー。かれの目から一筋のなみだがすうっと流れ落ちた。
電話がきれたあとにようやく、レオナルドはアントニーの気持ちに気が付いたのだった。

数日後の授賞式に、アントニーの姿はなかった。レオナルドは、かざられていた大賞の絵を複雑な気持ちで見つめていた。アントニーの絵の題名は「アトリエの思い出」だった。

（植木　洋）